

農薬の使用について

化学合成農薬の使用状況(H21年産)		
使用資材名	用途	使用回数
ヒドロキシイソキサゾール	殺菌	1
プロベナゾール	殺菌	1
フィプロニル	殺虫	1
ピラクロニル	除草	1
ベンゾビシクロン	除草	1
ベントゾン	中期除草	1
グルホシネート	農道畔畦 除草	1
エチプロール	殺虫	1
合計		8

ヒドロキシイソキサゾール 商品名 タチガレン

4月の播種時にシャワーで苗箱の床土に散布しています。立枯病という病気の予防効果に期待し、1.5葉期頃からプール育苗を行っています。一般・慣行では2成分のタチガレエースと殺虫剤のダコニールの合わせ技を指導されます。

私はダコニールで具合が悪くなるため、もう使いたくありません。

プロベナゾール、フィプロニル

商品名 Dr.オリゼプリンス粒剤06

田植え時に苗に規定量の8割を上からふりかけて苗を植えています。殺菌成分には「いもち病」の予防、殺虫成分には田植え後にアゼから侵入するイネミズゾウムシやドロオイムシの防除効果を期待しています。

田植機上で同時散布できると省力化につながります。土作りが落ち着き、疎植でも収量をあげられるようになれば省略できることでしょう。

ピラクロニル、ベンゾビシクロン

商品名 サンシャイン ジャンボ

田植えが終わった後、田んぼにしっかりと水を貯え、水漏れが少ないことを確認してから除草剤を入れています。水に溶けて土壌の表層に処理層ができることで、まだ幼い雑草の成長点を枯死させることが目的です。雑草と生育段階が重ならない点が田植え移植栽培の有利な点です。

2009年夏、中古の三輪田植機を改造し、除草機として活用して、さらなる低減を目指しています。

ベントゾン 商品名 バサグラン

田んぼの表面の凸凹があったり、水持ちが悪かったり、前記の除草剤に対して雑草側の抵抗性がつくと、雑草が繁茂する田んぼが目立ちます。

6月下旬頃から、一度落水する中干し作業のついでにこの中期除草剤を使用するほ場もあります。イネ科以外の雑草には大抵効きますが、裏を返すとヒエには効かないということ。費用が10aあたり2,000~3,000円もかかりますので、できれば使いたくないものです。

グルホシネート 商品名 バスタ



田植え後からアゼや斜面の草刈りを取穫まで3~4回しますが、7月中旬ともなると草刈りで田んぼへ害虫を追立てることにつながりま

す。カメムシ吸汁害を考慮して8月下旬まで草刈りできないことを考慮すると、7月初旬から中旬にかけては、除草剤を葉茎散布して畔畦雑草の生育を抑制し、9月初旬まで草刈りをせずに済むようにします。間違つて稲にかかると稲は枯れます。バスタはラウンドアップと異なり、根までは枯らさずらく植生や傾斜地にやさしく安価だと言われています。

エチプロール 商品名 キラップ

穂が出揃った頃、8月中旬~下旬にかけて、田んぼの中のカメムシの防除に使います。お米のキスマークはほとんどがこの時期の吸汁痕です。出荷玄米に0.3%以上混入すると1等にはできなくなり、商品としての価値は下がり、販売に苦勞します。

今日の精米業者は1等でもほぼ必ず色彩選別機に通して除いていますので、落等した場合は1等と比較した歩留まりの低下割合を確認し、不当に買いたたかれないように注意しましょう。



とても小さな
カメムシ



種子処理と施肥について

種籾の比重選（塩水選）は行っていません。

ライスグレーダーに麦向の2.2ミリのアミで選別します。

種子消毒（温湯消毒）



浴槽にお湯をはり、LPガス風呂釜で追い炊きして60度のお湯を準備します。

かき混ぜた状態で60～62度を示したら火を止めます。乾籾のまま5

kg～6kgのモミ袋を2袋同時に入れます。各袋を5回以上は揺すってから静置し、8分のキッチンタイマーを作動させます。3分と6分経過したら数回ゆすりましょう。タイマーが鳴ったら冷水槽で良く冷やし、水切り後また水冷を数回繰り返し、終えた種籾はそのまま別の容器で浸水に入ります。

引き上げる時に57度以上の温度であれば十分な効果が期待できます。効率的に行うには冷却作業をしながら再点火してお湯を暖めます。

播種量は120～130gで現在行っています。

元肥 ポカシ肥（たい肥）

川合肥料（静岡県）のポカシ大王という肥料を春耕前に約5袋入れています。普通のブロキャスで散布できます。15kg入で窒素成分が約6.3%。5袋きっちりです約5キロの有機窒素成分を期待しています。

価格は約1,029円+送料200円程度で共同購入できます。

現場たい肥を入れるにしても散布にはマニアスプレッダが必要とされます。それよりは秋に生の稲ワラを田んぼに返し、春にポカシ肥料を入れることを選択しています。

県内企業でも水産加工廃棄物や鶏糞を利用して、JAS有機にも対応する行程・規格の粒状ポカシ肥を安価に作る企業の育成が求められています。

元肥2 化成側条

化成肥料を田植え時に側条施肥しています。側条に対応した固く揃った粒状タイプのもので、寒冷年のことを考えるとリン酸の成分が高いものがふ

さわしいです。窒素成分で約3kgを目安にしています。あまり窒素成分が高いものを少量で使うと施肥ムラが出るので、窒素成分10～13%の肥料だと良いでしょう。もちろんペースト施肥でも可能です。

設備が無い初期の段階では、耕起後か荒代の後に14～15%の化成肥料をアゼから10aあたり20kgを散布機で散布して栽培してみましょう。

元肥3（育苗）

育苗に使う化成肥料も本田に使用した換算をしないといけません。

うちでは窒素成分13%の育苗用化成コート肥料を1箱あたり50g使用しています。10aに最大30枚の苗箱を使うと1.5kgの肥料を使うことになり、窒素成分では約0.2kgと換算します。

植え付け密度について

現在疎植が見直されています。田植機は37株から慣行の最高90株まで多様な植え付け密度が選択できます。

田んぼの地力はそれぞれのほ場で異なるため、まずは慣行だった頃の約10%減の株数から始めてみてはどうでしょうか。ほとんどの場合本田の病害虫に農薬を使わなくて良くなります。稲こうじ病多発地帯でのボルドー使用・農薬カウントについては、農薬カウント無しで認められるはずですが、別途普及機関と相談してください。

田植機を更新した場合は爪の仕様に気をつけてください。はし爪からブロック爪となった場合は、根の損傷が大きいため植付本数を多めにとると良いと言われています。

はじめは試験段階として、様々な株数や本数で試して、じっくり観察してみると良いでしょう。

中干しについて

おそらく6月下旬の段階で1株あたり15～20本程度だと思われます。慣行に比べて不足に感じられると思います。中干しはガス抜き程度にして7月初旬には再入水し、穂ばらみ期の有効茎数で20本、疎植では30本を目指しましょう。

追肥について

成分で約0.7kgの追肥ができますが、葉色が濃いようでしたら中止するかまたは、良くできる田んぼの外周を避け、なるべく中心部を狙って散布します。ポカシ肥の遅効分と稲ワラの養分のため、砂質土壌以外では秋落ちの心配は不要です。特につがるロマンの倒伏には気をつけてください。

4月 播種 育苗



中古の田植機を使って田んぼに作溝



5月 耕起 荒代 植代かき



春には
菜の花あふれる
建石町大平
山田野地域

時には除草



ヤゴ・
トンボを育む



5月中旬から6月初旬 田んぼを植えて



稲刈り間近 いざ稲刈り

葛西拓美 ほ場 鯉ヶ沢町建石町大平
マップコード 492 592 300
自宅 つがる市森田町大館勝山173-3
IQ7T-KSI@asahi-net.or.jp



肥料農薬の物材費について

	必要量	内容量	単価	小 計
育苗肥料	1.5	10	2,500	375
ボカシ肥	75	15	1,300	6,500
化成肥料	25	20	3,500	4,375
化成追肥	5	20	2,500	625
タチガレ	30	500	2,000	120
除草剤	1	1	3,000	3,000
苗箱粒剤	0.8	1	3,500	2,800
カメ殺虫	1	1	1,200	1,200
合 計				18,995

H21年度の肥料農薬の物材費について概算をまとめてみました。一部にバサグラン等を使うことを考えると、約2万円だと言えます。

農薬や化成肥料を低減した分はボカシ肥に費やされ、慣行栽培とほぼ同じ水準か、やや高くなります。

これだけ経費がかかり収穫量が1～2俵減る（だろう）ことを考えるとなかなか踏ん切りがつかないのもつとものことです。

土作りが順調に進むと3年目で反収10俵獲れるほ場も出てきましたが、平均すると1.9ミリのアミ上で約8俵です。平野部の多収地帯で12俵以上あげる農家には遠く及びません。農家が化成多肥・多収から抜け出せない背景の一つと言える土地改良費や水利費についての言及はしないでおきます。

慣行栽培では坪80～90株の密植をし、茎数を早期に30～40本取り30本程度を活かす考えですが、特裁は全ての分けつ茎を有効茎とし、無理・無駄・過繁茂を防ぐことによって適正な多収を目指すものです。

適切な雑草防除と生育管理ができれば、本田の農薬防除に要する人件費や動力・機械代を大きく削減できます。

規模に応じて少しの面積からでも、特別栽培に取り組む練習をしてみたいかがでしょうか。

何よりも食味が良くなり、飯米用の田んぼでカメムシ防除を省略すれば、農作業を手伝ってくれた親子・親戚に胸を張って配布できるお米になります。

青森県の認証を受けるためには

1月10日までにA4で20枚程度の書類を出す必要があります。作付けほ場の地図が必要になります。地図は役場農林課等でA4サイズ等まで縮小コピーしてもらって準備しましょう。

初めての方は育苗用の農薬や本田の除草剤は農薬でないと思い込んでいる方もいますが、これらも農薬ですのでご注意ください。

隣地耕作者の同意を得てください。病虫害がまん延しそうな場合は追加の農薬防除をして認証申請を行わないことを約束し、守りましょう。

隣地の稲株から5m程度は緩衝地として別途刈り取りが必要となります。

畔畦等の除草剤の草枯らし（境界5m以内に散布する場合）も回数に含みます。

確認責任者については、なるべく集落内の関心のある農家どうしの方が良いでしょう。

農薬などを急に変更することになった場合

遅くとも散布の前日までに、変更のための申請書の提出が必要となります。

規定と計画に従ってほ場に看板を立てましょう

8月中下旬には認証申請書の提出

収穫前1ヶ月までに、確認責任者と一緒に、栽培記録や手帳・メモを参考としながら、先に提出した認証行程資料に具体的な月日を赤ペンで追記し、面積の全てであれば全て、一部取り下げる部分があればそれを引いた面積と数量を確認して認証申請を行います。

9月初旬から現地確認

日時を合わせて農林水産事務所の担当者と一緒に現地確認を行います。必ずしも確認責任者の同席は必要としません。

9月中下旬



県から認証しますという書類が届きます。速やかに指定機関に認証シールの作成を申し込んでください。業務用出荷や飯米であれば不要な場合もあります

ので取引先に確認して進めてください。

別途に農水省ガイドラインに基づき農薬等の使用状況のシール等を作成し、出荷する米袋に貼り付ける準備が必要となります。

幸運にも県の残留農薬検査にあたる場合があります。公費で残留ゼロの証明をしてもらえらる機会です。通常業者に委託すると最低でも1.6万円はかかります。